

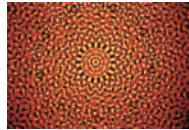
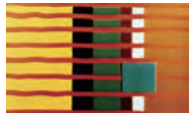
連続講座●映画以内、映画以後、映画辺境

トーク+フィルム上映

実験映画 ≠ アート？

実験的な表現を追求する映画は、すでに20世紀の初頭から存在しており、さまざまなかたちで美術との接点をもってきた。一方、映像のデジタル化が一般化した現在、メディアの多様化とジャンルの細分化が進むなかで、実験映画の位置づけは曖昧なものになっている。実験映画と美術との関係、あるいはメディアの変遷とジャンルとの関係を歴史的に俯瞰することで、実験映画(あるいは実験映像)のもつ意味をあらためて考えてみたい。

(西村智弘)



参考上映作品

※フィルムでの上映になります

オスカー・フィッシンガー
「ラジオ・ダイナミクス」(1942)
4"00

ブルース・コナー
「A MOVIE」(1958)
12"00

ブルース・ベイリー
「オール・マイ・ライフ」(1966)
3"00

ジェームス・ホイットニー
「ラビス」(1966)
8"00

ジョージ・ランドウ
「エッジ・レタリング、ごみ、
スプロケット穴などが現れるフィルム」(1966)
4"00

フランク&キャロラン・モリス
「CONEY」(1975)
3"00



西村智弘

(映像・現代美術批評)

1992年、美術出版社主催の「第11回芸術評論」で「ウォーホル／映画のミニマリズム」が入選。以後、映像・美術評論家として活動する。著書に『日本芸術写真史』(美学出版社、2008)、近刊予定に金子遊・西村智弘共編著『アメリカン・アヴァンギャルド・ムービー』(森話社)がある。日本映像学会アナログメディア研究会代表、美術評論家連盟会員。



とちぎあきら

(東京国立近代美術館フィルムセンター)

「月刊イメージフォーラム」編集長、映画に関する執筆、翻訳、通訳、字幕翻訳および映画祭の企画などを経て、現在、東京国立近代美術館フィルムセンターで主任研究員を務める。主な翻訳書に『ロバート・ロドリゲスのハリウッド頂上作戦』、『キリング・フォーカルチャー』(共訳)など。



七里圭

(映画監督)

早大在学中から約10年の助監督を経て2004年『のんきな姉さん』で監督デビュー。主要作に『ホットtentトエブロンスケッチ』(06)『眠り姫』(07)『映画としての音楽』(14)。短編『DUBHOUSE』(12)が、2013年の25FPS国際映画祭でグランプリ。近年はアークスモニウムを用いた上映パフォーマンスや、「音から作る映画」プロジェクトなど、映画を拡張する表現を思案中。

日本映像学会アナログメディア研究会 + charm point 提携企画

連続講座「映画以内、映画以後、映画辺境」第四期； 『え？実験映画はアートじゃなかったの？』

西村智弘(映像・現代美術批評)

とちぎあきら(東京国立近代美術館フィルムセンター)

七里圭(映画監督)

日時；2016年9月17日(土)

開場 16:30 /開演17:00 (終了予定 19:00)

会場；阿佐ヶ谷美術専門学校 521教室

入場無料 ※ただし資料代500円が必要となります。

■どなたさまでも、ご参加いただけます。



阿佐ヶ谷美術専門学校
166-0011 東京都杉並区梅里1-3-3

tel:03-3313-8655

mail: analogmedia2013@gmail.com

access: 地下鉄丸ノ内線「新高円寺」南口下車4分